留学体験記

出家体験を中心に

矢野秀武

「ねえ、マイ。矢野さんが、今度出家するらしいのよ。知ってる？　瞑想を教えているお寺なんだって。タイの宗教をいろいろ研究してるのだから、出家するのも良い体験になるかもしれないわね。」

タイ留学中に、私と同じ寮に住んでいた美紀さん(仮名：日本人女性)が、彼女のルームメイトのマイさん(仮名：タイ人女性)にそう告げたのは、単に歓談の場を盛り上げるきっかけを得ようという程度の思いだったのだろう。しかし、歓談の場で宗教や政治の話しはタブーだとよく言われるように、言葉を継ぎ足せば継ぎ足すほど、この２人の思いの間に埋めきれないズレが紡ぎ出されていく。

「あら、そうなの美紀。でも矢野さんはちゃんと出家の意味わかっているの？　研究なんかじゃだめなのよ、ちゃんと信仰してないと。それにパーリ語の経文は詠めるの？　それから、たくさん戒律を覚えなくちゃいけないし、修行の厳しい森の寺なら１日１食なのよ。私の兄はカンチャナブリー県の森の寺で得度したことがあるけれど、大変だったそうよ。」

「そんなこときっと平気よ、ちゃんと知ってるんじゃない。それよりも、髪の毛も眉毛も剃っちゃうんでしょ。見てみたいわ～、矢野さんのつるつる顔、フフフ。」

「美紀・・・。タイ人にとってはね、得度は大切なものなのよ。わかる？　何と言ってもお母さんのための功徳になるのよ。もちろん矢野さんのご両親も日本からいらっしゃるのでしょう？」

「え？　あ～、いや～、お忙しいでしょうからね。」

「そう残念ね。で、美紀達は得度式に出るんでしょう？　普通は親族が髪の毛を剃ってあげるのだけどね。友人も式には行くのよ。」

「矢野さんが出家する頃には、あたしはもう日本に帰ってるわ。」

「じゃあ、１人で出家するの？」

「よくわからないけれど、そうじゃない？　可哀想だからミツオ(仮名：同じ寮に住む日本人男性)も一緒に出家したらいいのよね。ハハハ。」

「そうね、その方がいいけど。ミツオはタイ語ができないでしょう。どうするの？」

「(冗談なんだけどなあ)・・・」

・

1995年５月から1997年４月の２年間、私はタイの首都バンコクにある国立大学、チュラーロンコーン大学に留学していた。留学とは言うものの、実質的には現地調査が主な目的であり、学内施設の利用や家賃の安い寮の部屋を確保するために、留学という形で当地での学籍を取得したようなものだ。実際、授業に顔を出したのは週に１回ほどであった。また逆に現地調査とは言え、伝統的な人類学者が行ってきたように、村落の住民と寝食を共にしていたわけではない。私自身の研究上の興味の対象が、都市部の宗教運動であり、信徒達はバンコク郊外にある寺へ週に１度各地から集まってくるため、彼らの日常生活の身近な距離に入り込むというのには困難があった。以下に、このような現地調査を主とした留学体験の一部を綴ってみたい。

タイでは1970年代中頃から、都市新中間層の信奉者を多く抱える仏教団体や、同様の階層の人々に支持者の多い仏教思想家が台頭してきた。私が留学中に調査の主要対象として選んだのは、そのような団体の１つ、タンマカーイ寺およびその財団である。この寺・財団は瞑想修行を中心としている団体であり、僧侶だけでなく、男女ともに在家者も瞑想修行を行っている。

またこの寺の中核的な僧侶は仏教大学ではなく、

一般の大学を卒業した人々で構成されている。

既存の村落の仏教や、代替的な神学のために都市に出てきた僧侶のいる寺院と比較し、行事の雰囲気や組織運営や布教方法などかなり異なっている。会員制を取っていないので、明確な信徒数はわからないが、大きな行事には10万人集まると言われている。海外にも支部を持ち、2年ほど前に東京にも支部が開設された。

この寺・財団の活動の特色の1つは、学生が多い点にある。寺・財団形成の一翼を担ってきたのが学生であったこともあり、学生主体の活動は活発である。僧侶や女性出家者の主要なリクルートはこの学生活動によるものとさえ言える。

私は大学の授業にほとんど参加せずにいたが、チュラーロンコーン大学の仏教クラブ(タンマカーイ寺・財団の関係者が主催している)の活動を見学するため、夕方になると大学に足を運んでいた。そのうち、私の近辺では「矢野さん、最近夕方になると出かけているけど、若い女の子に会いに夜な夜なクラブ通いしてるらしいよ」という誤解(?)も生じたようだ。まあ、確かに夜な夜なのクラブ通いではあるし、若い女の子もいるのだが・・・。

このクラブの部長からタンマカーイ寺での集団出家のプログラムに参加してみないかと誘われたのは、タイの学期の年度末が近づいた1月の事であった。この集団出家は、大学の夏休みである4月〜5月(タイで最も暑い時期は3〜5月である)に行う、おもに大学生を対象とした出家と修行のプログラムである。暑期の出家はタンマカーイ寺・財団の専売特許とまでは言えないが、多くの寺院では雨期(雨安居にあたる7月〜10月頃)に一時出家する慣行がある。タンマカーイ寺でも雨期の一時出家は見られるが、やはり最も多くの出家者が集うのは、夏期のプログラムの方である。農村社会から都市社会への生活サイクルの変容を示しているとも言えよう。

集団出家は大きく3つの活動からなる。まず3〜4日ほど、バンコク近郊の他県の軍事施設に泊まり、体力や忍耐力を培う訓練を行う。この寺と軍の関係は今一つ明らかになっていないのだが、タイ社会における軍のイメージからして、仏教と軍という組み合わせは珍しくはあれ、奇異なものとは思われていないようだ。その後、別の県にあるタンマカーイ寺・財団の敷地に移動し、約3週間ほどさらに訓練を行う。この訓練では、規律や団体行動が事細かく指導され、自分の自由時間などほとんど与えられない。また瞑想修行も行い、さらに得度のためにお経を暗記し儀礼の練習なども行われる。この期間参加者は剃髪し上下白の服を着用する。また8戒を持し1日2食の生活を送る。

得度式は4月の下旬に、バンコクの有名寺院であるワット・ベンチャマボーピット(通称、大理石寺院)にて約1週間に渡り執り行われる。他の寺院で得度式を行うのは、寺院間で何らかの取り決めがあるのだろう。得度式が約1週間に渡って行われる理由は、出家者の数の多さにある。例えば、私が参加した集団出家のプログラムの場合341名が得度している。一日で全員を得度させるには時間的に困難なのだ。この出家式を経てさらに約5〜6週間、寺院で僧侶・沙弥として修行を行う。ただし、修行内容は出家前のものとはそれほど大きな差はない。逆に言えば、出家前の修行は出家後の僧侶としての生活と修行を全うするための予行練習なのである。

比叡山の回峰行ほどの苦行とは言えないが、全体を通して、訓練・修練が修行の中心となる緊張を強いられる体験であったと言えよう。青木保氏が『タイの僧院にて』で綴った出家体験とは全く逆に常に時間に追われ、戒律の中の開放感などとはとても言えないほど、心身ともに戒律以外の規律に縛られるものであった。この集団出家プログラムの特徴の1つである規律重視の訓練については、稿を改めて述べることとし、ここでは出家式と瞑想修行について若干の感想を述べたい。ただし、調査の報告のような体裁をとりながらも、内容は単に私事の告白的な「ぼやき」にすぎないということは、あらかじめご了承していただきたい。

・

集団出家プログラムの前半の山場は何と言っても出家式にある。参加者の誰もが得度するために集まってきている。冒頭の2人の女性のやりとりにも見られるように、タイでの出家は両親とりわけ母親への功徳となる恩返しの意味が含まれてい

る。比丘尼の伝統が絶えた上座部仏教では女性が得度して救済へと到る道は閉ざされているため、息子が自分の出家の功徳を母親と分かち合うことが恩返しとされるのだ。もっとも、息子が生涯僧侶のまま還俗しないとなると、親は嬉しさの反面で失望と寂しさを抑えがたい事もあるようだが。

出家式の当日、事前に親類と面会する時間はない。自宅通学の学生の場合でも、約1ヶ月ぶりに親と面会するのが得度式の場である。下宿者の中には1年ぶりという者もいよう。出家に際して髪を剃るのも、この寺では親類ではなく寺の僧侶であった。

出家式は午前中に始まった。341名の白衣の修行者が、列をなして本堂の周囲を3周する。出家前の髪を剃った白衣の修行者をタイ語でナーク(タイ語では「竜・ナーガ」とおなじ綴り)と呼ぶが、長蛇の列をなした私たちの姿を上空から眺めたら、きっと「てかてか」に輝く鱗を持った白竜を連想させたことだろう。

この日の出家式は僧侶ではなく沙弥になる儀式であった。まず沙弥になってから後日僧侶となるための得度式を行う。まずは布薩堂内で出家の儀式が始まり、その後堂の外にでて、親類や知人から袈裟を贈与してもらう儀式へとつながる。その後、僧侶から10戒を授かり、親類から托鉢用の鉢を与えられて終了する。

クライマックスは10戒を授かるときよりも前にあった。親類・知人からの袈裟の贈与式である(私の場合は大学の仏教クラブの関係者から贈与された)。銅鑼の音に合わせて50〜60人の修行者が儀式の場に入場してくる。次の銅鑼の音で止まり、コの字型にならぶ。左を向くとそこには親類・知人が座している。そして、前世・現世でなした全ての過ちを許してもらい、出家の許しを願う懺悔文を一斉に述べる。感極まって涙する者もいる。

修行者皆で同一の行為を行い、また懺悔文の文章自体も型にはまったものだ。それに修行者にとっては飽きるほど何度も口にしてきた言葉でもある。しかし逆にその形式性が、修行者や親類・知人の個々の多様な思いを吸い上げることもあるのだろう。なまじ、個別の思いを具体的に表明するよりもはるかに多くのものを伝え合っていたと思える儀礼であった。また出家後の寺院において行われた出家体験のスピーチ・コンテストの際にも、多くの者が出家の意義と親への恩に言及し、その感謝の気持ちを表明しながら目を潤ませている。如何にタイにおける出家が親とのつながりの中で意識されるものなのかと、再認識させられた。しかし、世俗生活から離れる出家生活によって、親子関係という世俗生活が再構築されるというのは、なんとも逆説的な話しである。

・

集団出家プログラムのもう1つの山場は瞑想修行にある。訓練開始時から毎日4時間近く瞑想を行うが、得度後のプログラム後半にはいるとその時間はさらに増える。私が参加した年のプログラムでは、約10日間、北部タイの風光明媚なチェンマイ県の山奥に建設した瞑想修行所で1日8時間近くの瞑想を行った。そして、瞑想修行の日が経つごとに、修行者の瞑想意欲も高まる。さらにチェンマイでの瞑想修行も最終日に近づいた頃には、住職直々の指導がある。訓練中に住職と質疑応答できるのは後にも先にもこの時しかない。

タンマカーイ寺で行う瞑想は特殊なもので、上座部仏教の一般的瞑想方法とは大きく異なる。一般的な上座部仏教の瞑想は自分の呼吸に集中したり、自らの動作や思考の1つ1つを言語化して把握することを通じて、自他全てへのこだわりを取り除いていく方法をとる。瞑想の途中に何らかの像が「見えた」としてもそれにこだわらないよう指導される。しかし、タンマカーイ式の瞑想の場合は、逆にこの像を「見る」ことを通して涅槃に到ろうとする。具体的には臍上約3 cmの体の中心部分に、水晶の球をイメージする。修行が進むと水晶ではない光の球がその場所に現れ、ついでその中心から人の座像が現れる。それは自分の内なる心身である。この座像の中心から次々と座像が現れ、そのたびに座像は仏像のようなものになり、より清い心身となり、仏法(ダルマ。タイ語でタンマ)の身(カーヤ。タイ語でカーイ)、つまり法身(タンマ・カーイ)に到達する。さらに修行を積むと涅槃に到ることができるとされている。

集団出家プログラムでは、自分の瞑想体験を逐次チェックするよう指導が行われる。1回の瞑想

時間は30分から２時間程度であるが、瞑想後にその成果や体験を逐一報告書に記入して、指導僧に提出することが義務づけられている。また、口頭で瞑想時の体験を述べ、僧侶から指導を仰ぐこともある。とりわけプログラムも終盤にさしかかると、質疑応答は頻繁になり、修行者の真剣味も増してくる。中にはプログラム終了後も、１年間チェンマイの瞑想所でさらに瞑想修行を続けられるよう申請する者も出てくる。還俗を１年間延ばした者は10人近くいた。親や大学からの許可が得られずに延長できなかった者も同数近くいたようだ。

私自身の出家中の日誌(訓練期間中は日誌を指導僧に提出することも義務づけられていた)を、読み返してみると、瞑想をはじめて１週間ほど経つと瞑想を楽しいと感じるようになってきていることがわかる。他の修行者も同様なのか、その頃から瞑想体験についてお互い語り合う機会も増えていった。チェンマイの瞑想所にいる頃には、説法の長い僧侶に飽き飽きして、それよりも瞑想をしたいと思うようにさえなっている。その時、自分を瞑想修行にひきつけたものは、体験時の清々しさと、徐々に集中度が増す上達感だったように思える。とはいえ、私は決して信心深い訳でもないし、神秘体験に興味を持っている方だとも言えない。実際、還俗後はあまり瞑想を行っていない。

瞑想修行がもたらすものは、清々しさや上達感だけではない。訓練中に次のような場面に出くわした。ある日、皆で瞑想をしていると、隣の友人が急に瞑想を打ち切りノートを取り出した。そして目を爛々と輝かせて一気呵成に何かを書きつづると、しばらく放心状態になり、その後満足そうな顔をしてまた瞑想を始めた。何か特殊な神秘体験でも得たのではないかと思い、瞑想時間の終了後、私が問いただしてみたところ、彼は恥ずかしそうにしながら次のように答えてくれた。

「いや～、もうすぐ還俗できるかと思ったら急に食べたい物が頭の中に浮かんできてね、もうどうしようもなくなったんだ。それで、端からそれをノートに書き始めちゃったんだよ。菓子パンだろ、チョコレートだろ、焼き豚もね、なんでもかんでも端から食べてたくてね。腹一杯食べたいんだよ。」

瞑想修行は清々しさや上達感とは全く逆の状態を生み出すことがある。特に一定の禁欲状況にある場合には、そうなることが間々ある。上座部仏教の僧侶は227の戒律を持している。というよりも、227戒を自他ともに有す事を認められた者が僧侶だと言えよう。戒律は単に禁止事項という物ではなく、仏教的な法則や集団規範というものを通じてこそ、人間は人になるという考えがそこにはある。しかしそうは言ってみても、通常の人間には継続的な実践の困難な禁止事項であるという事に変わりはない。僧侶は歌舞音曲を楽しむ事はできない(竪琴なんか弾いてはいけない。琵琶法師のようなものはタイにはいない)。食事も午前中に２回、与えられた物を食す。アルコール類を飲用することもできない。性行為は勿論、(無意識の射精は許容されているが)自慰や猥談もしてはいけない。

このような禁欲状況で瞑想をすると、瞑想時の集中がそがれることがある。それは雑念が生じて、瞑想に集中できないなどと言うレベルではない。妄想と言ってよいようなものが生じる。１つの欲望に徹底的に精神が集中し、その実現のための手段を夢想する。私の場合、幸いにも戒律を破ることは無かったが、瞑想中に何度も妄想が湧いてきた。お酒が飲めて、豪華な食事がしたい。もしできるなら、まずキリッと冷えたビールを飲みたい。右手にスーパー・ドライ左手にギネス、そして枝豆をむせるほど口いっぱいに頬張って、それから・・・。今になって考えてみると笑い事なのだが、とんでもないことを考えていた。食事だけではない。もし女性と１晩ともに過ごせるなら、あんなことして、こんなことして・・・と、ちょっと口では言えないようなほとんど狂人的な妄想が生じてくる。今まで自分が思ってもみなかったことがどんどん浮かんでくる。先に述べた同僚僧の行為を笑える立場ではなかった。

どうも信仰心や修行が心底身に付いていない禁欲修行者にとって、瞑想はある種危険なものなのかもしれない。瞑想修行は自分の中に潜在している狂気に近い欲望をまざまざと見せつけてくる。あるいは、欲望を過度に練り上げてしまう。たぶん信仰が心身深く染み込んでない私などは出家生

活は長続きしないだろう。

・

以上のように、タイの若者と2ヶ月半に渡って寝食を共にする機会を得て、彼らと自分の位置のズレを埋めていく何かが得られたのかと考えてみると、正直なところそういうものを得たと簡単には言えない。そもそも現地調査に際して出家する必要があったのかという所からして怪しい。自分なりに出家を決断した理由はあるが、どれもこれも何か浮ついた言葉に思える。自分の体をくぐり抜けてきた言葉でないことは、出家前から気がついていた。冒頭のやりとりで述べられているズレは私自身が抱えているズレである。そのズレは決して埋まったわけではないし、埋めたいとも思っていない。しかし関わってしまったし、関わることを意図してはいた。

出家に際し、出家申請用紙に自分の信仰する宗教を記入する欄があるのだが、自分は仏教徒と書いた。欄があるという事自体、他宗教を記載する事も認められているのだろう。ただ、自分は仏教徒なのか今持って確信がない。出家中にも、同僚の僧侶から、ブッダの教えを信じているか、輪廻転生を信じているかと何度も問われ、苦笑したことが度々あった。瞑想時の妄想体験を抑制するだけの信念もあるとは言えない。信仰心とまで行かなくても、出家式における特有の親子の感情的なつながりさえ共有していない。

ただ、どうも彼らと近い場所にいるのではないかと感じていることが1つだけある、大した必然もなくいわば偶然が重なって、タイの上座部仏教の世界と関わることになった自分は、集団出家に参加してきたタイの若者が持っている仏教信仰のあり方と一脈通じているようにも思える。彼らもまた信心深くして出家を志したわけではない。そういう者もいるのであろうが、多数は内外からの慣習的な圧力によって参加している。そして彼らが訓練中に口々にするのは、仏教の意味が初めてわかった、自分が仏教徒であるということが認識できたというものである。

村落社会の生活に埋め込まれた仏教的な信仰から離れ、都市社会の中で学校教育や国家儀礼ないしは葬式という形で仏教に触れる現代タイの都市部の若者にとって、仏教は関わりはあるがその内実がよくわからないもの、内実があるのかさえわからないものとなっているのではないだろうか。その偶然としか言いようのない関わりだけの関係に、内実を与えて運命というもっとも強い必然に変えていく作業が、集団出家の訓練においてなされているように思える。彼らが偶然の地から進んだ同じ行き先に自分が向かうとは今の所思えないが、彼らの出発点と私の今の到達点は完全にではないが重なっているように思える。たとえその地点の前後でのズレがどれほど広がろうと、内実の薄い偶然の関わりをタイの上座部仏教に持ちそこからどう進むべきかと思案しているという地点では、案外接点を持っているのかもしれない。